ヨーロッパにおける 国際日本学学術会議管見（上）

――ヨーロッパ佛教学者との関連――

佐々木現順

一　はしがき
二　若い学徒の将来
三　国際語とその意味
四　日本文化研究の総合的発展
五　ヨーロッパの佛教学者
六　韓国の大学とヨーロッパの大学（以下次号）
七　国際日本学会発表内容
八　極東的佛教学と日本文化
九　西欧的佛教学と日本文化
十　むすび

一　はしがき

今夏は二回続いて海外へ渡航する機会を持った。ソウルの東国大学主催の国際佛教学術会議（一九七六年八月三十一―九月二日）とスイスのチューリッヒ大学におけるヨーロッパ・日本学学術会議（一九七六年九月二十一―二十三日）とであった。

従来、私は欧米の会議にしか出ていないので今回の二学術会議への招待出席は、極東と西洋の相違を直観する上に、多少とも役に立ったように思う。主観的印象は多いことであるけれども、今は、それを内輪にとどめておき、一般化

しうる点だけを一、二述べておこうと思う。

二　若い学徒の将来

言うまでもなく、今後の若い学徒の活躍の舞台は世界の中の日本であろう。世界といえば、海外に移り住んでしまって海外で活躍するということかも知れないが、私のみたところ、日本人の学問特に佛教学はそこまでは広がるまい。又、佛教学はその必要もないと思う。何故なれば、日本人の佛教学には歴史と民族的伝統の重みがのしかかっているし、それを断ち切っては根なし草になってしまうからである。佛教学は宗教である以上どこまでも個人的ではあるが、佛教学は勝れて民族的でもあるからである。個人と民族性を離れて、ただ普遍的人間という普遍人のためには佛教は何ら関与しえないであろうからである。ローゼンベルグが『佛教哲学の諸問題』（拙訳、一九七六年・清水弘文堂）の中で佛教を以て民族宗教であるといっているのは誠に至言である。こういう訳で佛教学者たらんとする若き学徒は海外へ移住してしまうまでの必要はないであろう。けれども、日本の中で日本的思惟だけにとどまっていることはもはや出来なくなったことを知らねばならない。元来、佛教は日本人以外のインド・中国・チベット人などの思惟を経て育ったものであったからである。それ故に今後の若い学徒は日本だけにとどまりえず、だからといって西欧諸国に移住する必要もない。とすると残された道というのは「世界の中に位置しているという自覚に立った日本的佛教学」ということになるのではないかと思う。具体的に言うならば、日本に在りながら国際的感覚を育てて行くという点にあるのでないかと思う。中途半ぱのようであるが、世界性と民族性という両極端を統合止揚して行こうとするところに日本人学徒の努力の甲斐もあるであろうと信ずる。古代の聖者達もそういう努力をなして来た。

この意味で、ヨーロッパの会議に、私は三人の若い学徒を同行した。吉元信行講師、ハンブルグ大学で四ケ年の助手を経て帰った田端哲哉及び大学院生伴戸昇空の三君であった。諸君に国際場裡における学術交流の意義とその国際

的感覚に触れてほしかったし、これが将来の各自の専門分野に多大の影響を与えることを確信したからであった。

三　国際語とその意味

ところで日本円はそのまま或る処では通じはするが極めて限られた公的場所でしかない。日本語は日本円ほどではない。現在、国際語として会議で用いられている語は日本語でなく英・独・仏語であるからである。

極東で初めて出席した韓国の佛教学会の如きは日本語が韓国語で同時通訳されていた。これは異例であり、而も韓国語が日本学術語或いは日本的発想法をどれ位つたえるほどの役目を果したか、知りたいところであった。此の会議後、私は三日間、居のこって、その影響を聞いてみたけれど、日本語の講演は通達困難を覚えたらしい。然し、日本語でも許されるところに極東らしい良さもあるが、殆んど解されるところに至らなかったということは残念だと思う。私が初めて見た極東的国際の体験であった。同じ日本円流通の精神はスイスのヨーロッパ会議にもみられた。この会は日本学術というから日本語でよいだろうと思うた人もあり、日本人による日本語の発表もあった。日本人にさえ困難な術語や日本流の読み方の漢文調がヨーロッパ人―日本語専門家にでも―に解る筈もない。三分の一も解らなかったとはヨーロッパ学者の批評である。韓国の場合のように通訳がつくわけでもない。言いっぱなしである。発表者はどういう学的良心を以て発表するのか疑問ですらある。日本学についてのヨーロッパの会議ではフランス語五十%、ドイツ語二十%、英語三十%の割合で話された。私は「罪意識の展開」について発表し、英語を用いた。特に空思想と、罪を無知と述べた事が興味を持たれたようであった。

東洋といえど、タイ・ビルマ・セイロン以東になれば、国際会議といえば欧米並みの英・独・仏語である。然し現在、極東（韓国・日本・中国）だけが日本語でも―たとえ、解らなくとも―許されるのかも知れない。そもそも、発表は人に解らせるためである。それは、丁度、著書は売るために出版されるものだということと同じである。買い手

の心も考えないで著書を出すことが真の学者である如く言うのは余りにも身勝手であるし、そういう現実離れした考えでは、それこそ真の学問とは言われないかも知れない。

我々は止むなく英・独・仏語を用いざるを得ないのである。ここでも私は英語であった。それが礼儀だと思った。韓国で私の発表したのは—彼らが私に与えたもの—「感性と佛教」といったものだが、私は霊肉の関係を佛教発展史の上でみたいと思って、肉の意味付けをしてみた。インド・デリー大学のパンデェイヤ教授のコメントあり、インド人がインドのシャクティの重要性を説いた私の趣旨に賛意を表したのはインド人として当然であろう。セイロンのソンティ氏の話は業を倫理的なものとなしたが、私はその外に業にはシャクティ（宇宙力）というコスモロジーの基調があることを指摘しておいた。なお、この点で東国大学の李教授の質問もあり、意外に反対はなかった。というのは韓国では禅的佛教にある禁欲的道徳的規制が厳しい筈であったからである。あとで聞いたことだが、感性への形式的コントロールは必ずしも厳修されておらないのが実情らしい。だから感性に対する佛教的論理こそ求められているのでないかという。

何はともあれ、政治的会議に非ざる限り、学術会議なら我々は欧語の発表力を養うことがなお要請されている。特に、会議がそれを求めて来た場合、それに応ずるのが当然の礼儀であると考えた。

同時通訳者は韓国語と英語担当の教授らであったが、いづれも大学の教授達の中から出ている。その語学力には一驚した。同じ大学内でこれだけの人材をそろえてこそ国際会議を開く資格を持つ。この点、日本の大学として学ぶべき点が多大であろう。

四　日本文化研究の総合的発展

ヨーロッパにおける日本研究が漸く一つのアッソシェーションを持つに至った。その第一回が今回の会議である。

今回はホストとして、チューリッヒ大学の Ouwéhand が会長となり、会員など約四百名がリストされた。発表部会は経済・政治・哲学及び宗教・言語・文化・歴史なる六部会である。国際東洋学者会議は日本学会をもその一部にふくむが、余りに漠然としているので、本会が日本文化に集中して一会議を設立した。日本研究のヨーロッパにおける統一会議としては英国にもブリティシュ・アソシェーションがある。凡そ、会というものはヨーロッパのように、会設立以前に永年にわたって続けられている研究業績がなければならない。ただ、会だけ名のりをあげて、会員を後から集めるということであっては会ばかり増えるだけであって、実らないであろう。我々、日本人はとかく会を先に作りたがる。日本でも同好会的会議が続々と出て来ているのがそれである。どこにその理由があるかといえば—アメリカの某教授の言った如く—理由は簡単である。即ち、過剰人口であるからだ、といわれている。

ヨーロッパ全体としての総合的研究機関として本会は将来に非常な期待を持っている。ブルティンも出版している。次回はイタリーのフィレンチェで行うことが総会できめられた。総会では日本におけるジャパン・ファウンデーション及び外務省の援助及び研究者への経済的支援などが決議せられた。詳細の報告には紙数がないので後日にゆずり、会議中及びその後、全ヨーロッパ調査旅行中で会った日本にもなじみ深い人々の若干を選んで、その消息だけを簡単に記しておきたい。

五　ヨーロッパの佛教学者

ジュモリン博士・本会議中、ジュモリン博士が特に私の「罪意識」発表のため臨席された。彼は今までの拙論を全部集めていたし、読んでいたという。カットリック出の高名な学者で、今、キリスト教と佛教の業思想の論文を書いているので私のを集めたという。全く恐縮したが、注意して書かねばならない心がまえを学んだ。彼は中国佛教・思想の著名な学者（ドイツ人）で、早くから A History of Zen Buddhism が名著とされている。私はハーバード大

学で初めて彼の学識を教えられ、以来、一度、拝眉を得たいと思っていた学者である。はからずも臨席に来られた。新しい知己をえたのは私にとっての望外のよろこびであった。

ラモート博士・ルーヴエン町は静寂である。この世にこのような街があるかと思うような深い静けさの中に憩うところの町である。駅より五分のところに依然として博士の住居がある。私は海外では何度博士にお目にかかったか知れないが、博士は令妹と令姪と三人ぐらしの研究三昧の生活を送っている。数多くの学者に会った中には病体の老教授もいられたが博士は七十三歳の年齢ながら健康そのものであった。玄関まで令妹と一諸に出て待っていられた。旧交もあって既にシャンペンなど用意されてあり、非常なよろこびようであった。大智度論は丁度、今から第四十八巻に入るという。自著仏訳「首楞厳三昧経研究」など持ち来られ批判を求められた。本研究における漢訳と梵語のアィデンティフィケーションについて、私は幾多の疑問を提出しておいた。「仏訳智度論」中で、「無生法忍の忍 kṣānti は kṣam でなく kam (欲する)から由来した」という私見を採用して貰ったが、そのことについて謝意を述べたことである。更に、私は prajñāpāramitā の言語分析について私見をのべたが、当然であるとの支持を得た。そこでこの言語についても私は直ぐに論項を発表したいと決心を固めた次第である。「日本から和訳抜粋の著書などがどうして最近、あれほどに出版されて来たか」とか、「学問的意味」とかについて語り合った。全集物の出版については韓国でも、アメリカ学者の間でも色々沙汰されたが、たとえ、学問的価値は無いであろうが、日本のように佛教が生きている国では大衆化する必要もある。「価値はないが必要はあるといえよう。丁度、セイロンから大衆化のパンフレット類が続出しているのと日本から全集物が続出しているのと軌を一にしている。出版社の営利と編集の安易さということを度外視しても日本の現時点では必要である。尤も、学問ではないけれども」というのが欧米人学者への私の答であった。博士は独・仏語しか語らないため日本からの訪問者はあっても話が理解し難いと繰り返し話していられた。私も学問上の指示を受け又々、いくらかの学問的野心を向上させられたことである。

コンズ博士・一生の間、般若経研究に捧げられた博士は現在、ランカスター大学教授であり、ロンドンから三時間の地方都市セルボンヌの街に住む。自宅の岡をフォクス・ウエルと名ずけて一庵を結んでいる。附近は牧場と秋草のおいしげった静かなたたずまいで、教会が一つだけ立ち、秋雲がゆき交う。コンズ博士は心臓を害されており、もうこれ以上の仕事は無理だといわれ、一生の間、実に六十冊の著書となったと凡てを見せられた。日本語の寄贈本はかなりの数に上るが、「凡そ読めないのでこの中に入れてある」とて、長持ちの中に一括して入れてあり、カギは奥さんが持ち、「妻だけあけ得る」と笑っていられた。ここでは佛教学研究の将来、博士の人生観、そして自分の専門とする般若経・唯識学の立ち入った話などつきず、身体を気づかって、私は早く去ったが、それでも四時間はまたたく間に過ぎていた。数回会った博士だが最初の頃はロンドンにいられ、仲々の元気であった頃の懐旧談をたのしんだことである。幸い談話は凡て同行の吉元信行講師がテープにおさめたので、後日、コンズ以外の博士らとの談話記録も発表出来るかも知れない。

ホーナー博士・パーリ協会の活動について、筆者は屢々報告し続けた。パーリ聖典が近来、インド・セイロン・ビルマ等よりも出された。特にセイロン版のアッタカターの出版完成はロンドンのパーリ協会に先んずるものである。けれども、国際的場においては依然としてパーリ協会が基本となっていることは動かせない。渡欧の度にホーナ博士の協会を尋ねたが、四年前に会った時と相変らない健全さとその研究の進渉を今度もまた拝見することが出来た。待望していたサンモーハ・ヴィノーダニーの英訳はビルマの政情と訳者の病気のため困難となったことを知った。元来、東南アジアの学者はパーリ聖典の英訳については偉れた業績を持ち、また、その訳業の内容も確かである。併し、漢訳の英訳となると極めて粗雑であることは遺憾である。近著のアビダルマ・サムッチャヤの仏訳が諸学者間で批判の的になっている如きである。本書の仏訳の如きはパリー在住中になし遂げたものであり、又、曾つて私がパリーでドゥミェヴィーユ博士を通して知っていたものではあるが、又、ドゥミェヴィーユ博士の指導下にあった如くでもある

が、その仏訳研究が、粗雑であるのはどうしたものかと遺憾に思う。というのは漢訳の読解力についてフランスの佛教学界を過大評価している方が間違っていたのである。そのように、東南アジア或いはフランスの佛典漢文の訳は—ド・ラ・ヴレ・プサーンから現代もふくめて—再批判してかからねばならぬものがある。これらのことがホーナ博士との対談の一部であった。これにくらべ、ホーナ博士のパーリ原典の読解力はすばらしく、私の校訂しているサーラ・サンガハという読み難い写本も一見して、写本のまま意味を理解して行き、興味をそそる内容だから早く進めて行くよう督促せられたことである。

パウリ（E. Pauly）教授・原始佛教研究ではロンドンのパーリ協会とコペンハーゲン大学の研究室とが最も強い。また、最も多くの資料をそろえている。有名な A Critical Pāli (English) Dictionary もここから出されていることは衆知の如くである。曾つて王室アカデミーにあった研究室は現在、コペンハーゲン大学にうつされ、インド研究所 (Institut for Indisk Filologie) の新築のビルの中にある。その研究所の責任者はパウリ夫人であるが、大学ではスッタニパータ・ヴィナヤ等をも講義し、且つ CPD への寄稿と同時に事務一切を担当している。氏とは二十年来の旧友関係であるが、たゆまないねばりと、ラッセルやベートリンク以来の偉れた言語学が氏及びこのスタッフの財産となっている。新しい資料を見たが、その中の一、二を持ち帰ることも出来た。アカデミー院長であった民族学の権威ハンマリッヒ博士が一昨年逝去されたのは誠に残念であった。私事にわたるが曾つて、筆者がここで CPD の仕事に従事していた頃「その労にむくいる」といって、十八世紀作のメール・シャウムのシガー・マドロスを恵与して下さった。ハンマリッヒ博士の祖父の愛用した自家の至宝であったという。一つの美術品である。今はその頃、世話になったハンマリッヒ博士の思い出と、且つは美しいコペンハーゲンの北海の追憶と共に我が家の至宝とはなった。そんな追想にふけりつつ、Pauly 夫人のもてなしを受けながら、CPD 大事業の今昔を伺った。今はインドも仕事の中に入ったが仲々、困難な問題も出ているらしい。それでも全世界にわたってこの事業がすすめられているのはたのもしい。

日本のレベルではとてもこれだけの原資料をあつかうことは困難であろう。日本ははみ出てしまったようである。外国は実力の勝負で行く国だから仕方もないことだ。こういった今昔の話題から専門分野の辞書の話題にうつって行った。現在、オックス・フォードで、パーリ協会辞典の改修・増補をノイマン教授らが行っている。参考のため拙論も求められて使用されているとのことであった。こうして、伝統はうけつがれてゆく。ここに永年にわたるヨーロッパの佛教学がある。伝統といっても、人脈の伝統ではない。先人の業績をうけつぎ発展させる伝統である。この点、我国の伝統と本質的に違ったものがある。見知らない学者が業績だけを受けついでゆく、業績と無関係な地位の伝承ではない。ヨーロッパにおける業績が客観性において高く評価されるのもここに起因しているであろう。

シュミットハウゼン博士・ベルンハルト博士を迎えたハンブルグ大学は彼の突然の死の悲しみのうちにも、直ちにシュミットハウゼン博士にうけつがれた。彼はヨーロッパ佛教学界の天才学者といわれる程に、ずばぬけた言語学的才能を持っている。特に、先述せし漢訳経典に対するヨーロッパの不充分な点は彼によって充二分に補われるであろう。彼の講義はチベット、パーリ、大乗、サンスクリットの各方面にわたり、該博な知識と言語学的分析は今後のヨーロッパ学界を背負うものであろう。その詳しい講義内容については次の節で―大学関係を関説する際―再び述べられるであろう。彼の研究分野は主としてインド中観・唯識・論理の分野であることだけを初めに記しておく。　（未完）